

# Because I am a Girl

THE STATE OF THE WORLD'S GIRLS 2011

## So, what about boys?

### 世界ガールズ白書 2011 年版 サマリー **男の子の役割**

「Because I am a Girl 世界ガールズ白書」は、世界の女の子の現状を評価する、プランが発行する年次報告書である。女性と子どもが政策や計画で認識されている一方、女の子の具体的なニーズや権利は無視されることが多い。この白書は、女の子自身の声も含め、なぜ彼女たちに対して男の子や成人女性とは異なった対応をするべきかという裏づけを提供するものである。毎年の白書には、**2006年**に開始され、**9カ国**に住む**142人**の女の子たちの誕生から**9歳**までの暮らしを追跡した一次調査からの情報も含まれている。過去の白書には「女の子と紛争」、「女の子と世界経済」、都市やICTにおける新たな機会に目を向けた「女の子と都市化・デジタル化の波」などがある。これらの白書には、世界中の女の子の人生をより良く変えるためにできる本当に意味のある行動に関する、政策決定者や企画者に向けた提言が含まれる。プランは国際的支援組織であり、過去**75年**にわたって、世界**50カ国**で子どもとそのコミュニティとともに活動を行ってきた。

#### 男の子の役割

「私は女の子だから、女の子に影響を与える問題がどれだけ深刻なものかをほとんどの男の子たちがわかっていないということを知っています。わかっている男の子でも、自分に何ができるか気がつかないのです。ジェンダー平等、社会的不公正、それに性と生殖の健康は、男の子や大人の男の人たちの問題でもあるのです。だから、男の子や若い男の人たちが女の子をどうやって力づけられるか考えることは、とても大事なことです」

マニーサ、14歳、カナダ（注1）

「若い男の人や男の子たちが女の子を力づけるようにするのは良い考えだと思います。男性も女性も、誰一人として、差別を受けたり、学校に行けなかったり、貧しかったり、周りから不当な扱いを受けるべきではありません」

ダニエル、15歳、カナダ（注2）

本白書は、一連の「Because I am a Girl 世界ガールズ白書」の第5弾になる。世界の女の子の現状を調査し始めた最初の2007年から、私たちは「では、男の子はどうか？」と聞かれてきた。世界の多くの地域で、男の子も貧困や差別、機会不足に悩まされている。言うまでもなく、プランは平等性の観点から女の子に焦点を当ててきた。あまりにも多くの地域で、女の子は子どもであることと女性であることの二重の差別に苦しんでいる。彼女たちは学校を辞めさせられ、早くに結婚させられ、暴力の対象となる可能性も高い。これは不当だけでなく、考えなしだと言える。開発途上国に暮らす5億人の思春期の女の子や若い女性は、経済発展の主要な推進力となり得るのだ。健康、教育、そして職場での平等なチャンスを得られれば、女の子は行動的な市民となることができる。母親や教員として、公的あるいは民間企業のリーダーとして、家庭やコミュニティに力強く貢献することができるのだ。

だが、ジェンダー平等への取り組みは女の子と女性だけでは行うことができない。そこで、プランは男の子と男性に目を向けた。父親、夫、兄弟、恋人はみな、それぞれ担うべき役割を持っている。今年の白書では男性と男の子がより平等な社会の創造に貢献していくための方法とそうすべき理由を示していく。

本白書では、以下について明確な根拠を示す。

- ・ジェンダー平等は男の子にとってもプラスである
- ・良い父親は、自分の幸せだけでなく息子や娘の幸せも促進することができる
- ・変化をもたらすには、最初に家族や学校から始める必要がある。すべての年齢や段階における教育が鍵となる。

### なぜ男の子と若い男性がもっとジェンダー平等に関心を向けるべきなのか？

1 女の子と女性の権利は、基本的人権である。男性と男の子が正義と公平性を信じるなら、自分たちの母親、姉妹、恋人が自分たちと同様の扱いを受けていないことが多く、コミュニティでは同じような尊敬を受けておらず、人生における選択の機会も自分たちほど多くはないことに気づくはずだ。

2 ジェンダー平等の推進によって、男の子は学校で良い成績を修め、自分のアイデンティティに納得し、自信を持って感情を表現し、相互信頼と尊敬に基づく前向きな関係を築く技術を身につけられるようになる。

3 ジェンダー平等は、女の子と女性にとってはもっと自由を与え、新しいやり方で自分たちを定義することを意味してきたが、男の子と男性に対する変化にはあまり触れてこなかった。ジェンダーに対する新たな観点とは、両方のジェンダーが利益を受けられるような生産的な方法で力関係を見ていくものである。

### 主な調査結果

今年の白書では、プランはイギリス、ルワンダ、インドを含む数カ国の12歳から18歳を対象に一次調査を行った。国によって多少の差はあるが、総合的な結論としては、ジェンダー不平等と女の子に対する暴力が、家庭や学校で世代を超えて受け継がれていると言える。

- ・インドとルワンダの調査参加者のうち65%が、「家族をまとめるためには、女性は暴力に耐えるべきである」という文章を全面的あるいは部分的に肯定した。さらに43%が、「女性が殴られて当然な場合がある」という文章を認めた。

- ・「おむつ換え、子どもの入浴、食事の世話は、母親の責任である」。ルワンダでは67%の男の子と71%の女の子が、インドでは83%の男の子と87%の女の子がこれを肯定した。

- ・ただし、プランの調査によれば、子どもは両親が家事を分担している姿（例：父親が料理や洗濯をし、両親が2人で意思決定を行い、母親が家庭の内外で自由に時間を過ごす姿）を見るほうが実際には喜ぶこともわかっている。

- ・インドで本白書の聞き取り調査に答えた子どものうち60%以上が、「お金が足りない場合、女の子よりも男の子に教育を受けさせるほうがいい」と答えている。

### ジェンダー平等は男の子にとってもいいものである

組織レベルであれ家庭レベルであれ、権力を持つ男性は、女の子の人生を変える手助けをすることができる。しかし、今年の白書作成に向けて聞き取り調査を行った男性の一部は、ジェンダー平等が実現されると自分の息子が損をするのではないかと懸念していた。プランの調査対象となっている女の子の父親はこう語っている。「最近、男性に与えられる機会は少なくなっています。女性のほうがより心構えができていて、より勉強しているからです。女性は自分たちに平等な権利があることを学び始めていて、男性にはあまり居場所が残されていません」。しかし、別の父親はこう見ている。「今では、関係が前より良好になっています。団結力や連帯感が増し、コミュニケーションもよく取れるようになってきました。前よりうまくやれるようになってきているのです。以前はもっと暴力や優越主義が見られていました」。また別の回答者はこう言っている。「国が女性の真の価値を理解してくれば最高です。国の発展に役立つのだから」

ケニアの16歳、ニクソン・オドヨの経験は非常に啓発的だ。彼の父親は家族を捨てて家を出てしまった。母親は学校に通ったことがなく、子どもたちを育てるために大変な苦勞を

した。その後、ニクソンは姉が 15 歳で結婚して学校を辞めざるを得なくなり、母親と同じ苦労を経験するのを目の当たりにした。子ども時代の経験が、彼を女の子の教育のための活動家へと成長させたのだ。

ブルンジの 27 歳、パスカル・アキマナはとても暴力的な家庭で育ち、それを止める力もなかったため、父親が母親を虐待する光景をいつも見ていた。ニクソンと同様、彼も活動家になり、男性や男の子とともに活動して、女性と子どもに対する男性からの暴力抑止に取り組んでいる。彼も、個人的経験から男性、女性、子どもを問わず、誰でもジェンダー平等から利益を得られるはずだと知っているのだ。

ジェンダー間の不平等の中でも最も有害な「女の子と女性が何かしら劣っているという考え」が、男性からの暴力をあおる要因となっている。また、「本当の男」はタフで強くあるべきであり、表に出して良い唯一の感情が怒りであるという観念も要因のひとつである。これは女性と女の子に害を与えるだけでなく、男性と男の子を傷つけるものでもある。「伝統的な」男らしさの概念が、彼らに無理やり不快な行動を取らせているのだ。彼らは感情を表に出そうとしなくなり、あるいは自ら暴力を受ける経験をして、逆に他人に暴力を振るうようになるかもしれないのだ。

## 代償を考える

- ・北米および中南米とカリブ海地域の国々では現在、男の子が女の子よりも早くに学校を中退している。成績も女の子ほど良くはない。たとえば、アメリカ合衆国では、高校の成績平均点(GPA)は女の子が 3.09 なのに対して男の子は 2.86 である (注 3)。

- ・若い男性は交通事故、自殺、暴力で死ぬ確率がきわめて高い。これらの死因はすべて、伝統的な「男らしさ」を確立することに関係している (注 4)。ジャマイカ、ブラジル、コロンビア、及び一部のサハラ以南のアフリカでは、これらの原因で死に至る若い男性の数は、戦争中の国で死ぬ若い男性の数よりも多い。

- ・西ヨーロッパでは、24 歳までの男の子と若い男性の死因のうち 60%以上を上記のような外的要因が占めている (注 5)。

- ・世界保健機構は、南北アメリカ大陸で 15 歳から 29 歳の男性が殺人により死ぬ可能性は、世界平均リスクの 28 倍近くにもなると推定している (注 6)。

- ・ブラジルでは、2000 年の国勢調査により、15 歳から 29 歳の男性の数は、高い死亡率のために同年代の女性の数よりも 20 万人近く少なかったことがわかっている (注 7)。

- ・若い男性は、アルコールおよび薬物使用の割合も高い。アメリカで 15 歳から 19 歳の男性を対象に行われた全国調査では、伝統的な男らしさの概念を支持する若い男性は薬物使用、暴力や非行、危険な性行為を行う可能性が高いことがわかった (注 8)。

- ・若い男性は、自分の健康に関して医師や病院の助言を求める可能性が低い。その結果、15 歳から 24 歳の男性と男の子の 60%が HIV に関する正確かつ深い知識を持たず、感染を予防する方法も知らないままである (注 9)。

## 「父と同じ道を歩む」——父親の重要性

「娘たちには勉強のことや、かかわりを持っている周りの人たちのことをよく話します。最近の親は、以前よりももっと愛情深くなっています。子どものことをもっと考えるようになっているのです。以前の私たち（父親）はあまり話をしたりせず、働くだけでした」  
プランの調査に参加した父親、ブラジル（注 10）

「父親が娘に勉強させたがらないのは間違っています。そんなことをしても何もいいことはないのですから。そんなことをすれば父親は娘を世界から切り離すことになり、彼女たちは世界のいろいろな姿が見えなくなってしまうでしょう」

プランの調査対象の女の子の兄（注 11）

父親の役割は、きわめて重要である。父親が妻や娘をどのように扱うかで、彼女たちの人生における可能性や選択肢を減らすことも増やすこともできるからだ。それだけではなく、息子にも影響を与える。家事を分担する父親、子どもを分け隔てなく大事にして教育する父親、息子と娘を抱きしめ、妻を自分と同等の存在として扱う父親は、息子が大人に成長して自分の家族をどのように扱うかに強力な影響を与えるのだ。

家庭に深く関わり、責任感のある父親でいることは、父親にとっても子どもたちにとってもいいことである。調査によれば、以下のことがわかっている。

- ・実子または養子の人生に前向きに関わる男性はうつや自殺、暴力行為に陥る割合が低い（注 12）。
- ・父親との関わりが深い男の子は、危険な性行為に及ぶ可能性が低く（注 13）、初めて性行為を体験する年齢は上がる割合が高い（注 14）。
- ・良い手本となる男性が周囲にいる環境で成長した男の子は、ジェンダー不平等や有害な固定観念に疑問を抱く割合が高いと国連人口基金(UNFPA)が述べている（注 15）。
- ・アメリカ、オーストラリア、コロンビア、インド、パレスチナ、南アフリカの 14 歳を対象に行われた調査によると、親との関係が良好な（親に理解されており、気にかけており、うまくやっていると感じる）思春期の若者は社会的に主導権を握り、自殺を考えることは少なく、うつ状態に陥る可能性も低い（注 16）。

## 理想の父親像

支えになってくれる男性の親類もまた、女の子を早すぎる結婚や女性性器切除などから守る上で大きな役割を果たす。女性性器切除の習慣をやめるようコミュニティに働きかけるのは女性では難しいかもしれないが、男性ならば可能かもしれない。エジプトでは、宗教指導者シェイク・サアドが積極的な活動家となり、自分の妻にも女性性器切除の危険性を納得させた。「私たちは、娘にこの悪しき、非人道的な経験はさせないことを決意しました。

私はこうした問題にエジプトの家族と取り組み、変革をもたらしている一員であることが感じられて嬉しく思っています」

インスティテュート・プロムンドは中南米で「父性を育成するプログラム」の再調査を実施し、「数々の調査により、男の子が暴力的な行動を抑え、誇張された堅苦しい男らしさに疑問を感じられるようになる上で、暴力的ではない父親や男性が家庭にいることが重要であることがわかっている。また、多くの調査により、家庭に深く関わる父親がいることで、女の子がより健全で、より従属性の低い関係を男性と築き、性に関してより自主性を持つことができるようになることもわかった」と述べている（注 17,18,19）

若い父親はとりわけ、子育てや家事に組み、十代の母親の負担を分担して引き受けるための後押しや支えを必要としている。これは簡単なことではなく、仲間からからかいや敵意を受ける場合もある。

「ぼくと彼女の間子どもが生まれたとするよ。ぼくにその子のおむつを換える権利があるか？ ぼくが汚れたおむつを持っているところを見た友だちの顔が今から想像できるよ。からかわれるに決まっている。それでも、自分の子どもとはそんなふうに関わりたい。愛情のある父親になりたいんだ。ぼくの多くの友だちにとっては、大笑いの種だろうけどね」  
ディキツォ・レッシュウィティ、23歳、ボツワナ（注 20）

ディキツォのような若い父親の多くが、パートナーと子どもを支えていきたいと願っている。ブラジル、カメルーン、ジャマイカ、スウェーデン、ウガンダ、その他の国々でも、父親や将来の父親が子どもの世話にもっと参加できるよう推進する取り組みが立ち上げられている（注 21）。

プラン・フィリピンでは、多くの父親が家族との関わりを深めるプログラムを実施し、成果をおさめている。

「自慢のお父さん」——負担を分かち合うための、フィリピンでのプロジェクト（注 22）  
ある晴れた日の朝。プラスチックの桶には、汚れた衣類が一杯に入っている。川へ行く時間だ。アーリンは肩に桶を載せ、一方の手に空のプラスチックのバケツを持つ。かつて、これは彼女の日課だった。しかし最近ではアーリンの夫オニョが洗濯をすることのほうが多い。「たまには、2人で川に行って一緒に洗濯をすることもあります。楽しいですよ。家族の将来についていろいろと話をします」とオニョ。家事を手伝うようになったことで、2人の結婚生活はより強固になったと感じている。

オニョとアーリンは、2008年の「Pretty Ermats Meet Proud Erpats（すてきなお母さんと自慢のお父さんプロジェクト／PEMPE）」に参加した1,337組の夫婦のうちの一組だ。トレーニングのあと、アーリンは村の他の妻たちに夫がよい方向に変わったことを教えた。

「ある朝、目が覚めたら洗濯物を抱えて川へ歩いて行く夫の姿を見てびっくりしました。洗濯なんてそれまで一度もしたことがなかったのに」

参加者の多くが、トレーニングによって家庭内で良い変化が生まれただけではなく、子どもの学校での成績も上がったと話している。教師たちは、生徒たちがちゃんとした身なりで早く登校し、宿題も終わらせてくれるようになったと言う。「親が子どもの宿題や授業のことを気にするようになったんです」と話すのは教育省のサルセド地区責任者、ローズ・バガネスだ。今では、学校行事に参加する親も増えている。

「世代を越えて受け継がれてきた伝統的な考え方を変えるのは一朝一夕にできることではありませんから、大変な道のりです」と言うのは地元の ERPAT 指導者で7人の子の父親でもあるゴドフレード・カパラだ。「大事なのはわたしたちがその道のりを歩きだしたこと、そして良い結果が見られていることです。わたしたちはそれを頼りにしています」

### 正しいスタート——教育が鍵

幼稚園に行くことで、子どもが小学校に通って好成績をあげる可能性は高くなる。また、幼いうちからジェンダー平等を推進することにもつながる。たとえば中南米では、ユニセフがこのように記している。「総合的な幼児期の取り組みは、男らしさを強調して家庭や社会で女性に力を与えないようなジェンダーに基づく固定観念（ステレオタイプ）に疑問を投げかける上で、非常に効果的であることが示されている。たとえばペルーの幼児期プロジェクト『イニシアティヴァ・パパ』では、男性が子育てに積極的に参加することによって父親と幼児の絆が強まっている」（注 23）

### あずきとヘルメット——エルサルバドルにおける男女平等教育プログラム

エルサルバドル北部のカバニャスにおけるプロジェクトでは、幼児期からジェンダー平等の考え方を伝えている。

サムエルは服を汚さないように青いエプロンを着けてコンロの前に立ち、黄色い鍋一杯の豆を煮ている。別の金属の容器から鍋に中身を入れ、豆が焦げないように鍋を揺すった。「フリホーレス・レフリトス（煮てすりつぶした豆料理）を作るんだ」、と言う。

サムエルは有名なシェフではないし、今のところはまだ、料理好きな男性というわけでもない。しかし、そのどちらかになる可能性は、彼の父親や兄弟たちよりも高いだろう。

その理由は、サムエルがまだ4歳だからだ。エルサルバドル北部のカバニャスで、保育園に通っている。サムエルは運がいい。エルサルバドルでは保育施設は非常に少ないのだ。

エルサルバドルでなんらかの保育施設に通っている子どもは生まれてすぐから3歳までの子どものうち 1.8%、4歳から6歳では 57%にとどまっている（注 25）。しかも、サムエルが通っている保育園はただの保育園ではない。幼児期からジェンダー平等を推進しようと試みている国内 56 カ所の保育園のうちひとつなのだ。「幼児期にこうしたサービスを提供

することの重要性はあまり理解されていません。しかし、ここでさまざまな可能性を提供することで、男の子や女の子であることがどういう意味かという固定観念を打破していけると信じています」とエルサルバドルのジェンダー及び子どもの保護に関するプランの専門家、ベアトリズ・デ・パウル・フローレスは語る。

このプログラムは、保育園がどんなことを成し遂げようとしているのかを理解させるため、親たちとも協力している。たとえば、性差別にならない言葉遣いや、男の子と女の子に期待される振る舞い方について話し合っている。ベアトリズによれば、さほどの反発はないが、父親よりも母親のほうが会合に参加してもらいやすいとのことだ。

もちろん、男の子たちの一部は今でもヘルメットをかぶってハンマーを振り回す大工やトラックの運転手になりたがるし、女の子はお姫様になりたがる。だがこの保育園では、子どもたちは自分が一番やりたいことに何でも挑戦していいのだと教えている。サムエルと彼の友だちが、もっと平等で暴力のない社会の始まりを構築することができるとすれば、それはとても興味深いことだ。

### ぶたないことを覚える

男の子の教育は、ジェンダー平等に大きく貢献する。女性研究国際センターとインスティテュート・プロムンドが実施し、11,000 件の聞き取りを行った多国的調査では、中等教育を受けた男性は、ジェンダー平等に賛成する割合が高いことがわかった。そうした男性は女性に対する暴力も少なく、子育てに参加する割合が高かったのだ（注 26）。

国連女子教育イニシアティブ(UNGEI)は、中南米およびカリブ海地域についてこう述べた。「この地域では学校、特に中等レベルの学校を、男の子と若い男性にとって魅力的で快適な場所にするために多大な努力を費やす必要がある。男の子と男性の非識字と教育不足は、社会に深刻な結末をもたらす。西インド諸島大学の社会人類学教授バリー・シュヴァンヌ教授はこう言っている。『(男の子が) 教育を受ければ、おそらく (中略) 暴力、無責任な性行為等々は (中略) 大幅に減少するだろう』」（注 27）

### 心の底からの声（注 28）

男性たちは教室で待っていて、わたしたちはみな、小さな椅子にちんまりと腰掛けている。グループの最年少はウィルマン、最年長はウィルマンの祖父と言ってもおかしくないくらいビエンヴェニードだ。

わたしたちがここに集まっているのは、男性たちがプラン・ドミニカ共和国の協力のもとで携わってきた男らしさに関するプロジェクトについて話し合うためだ。参加者はそれぞれ別のコミュニティから来ているため、お互いに面識はない。活動はまだ始まったばかりだが、ここからの 2 時間で彼らは率直になり、活気に満ち、思慮深く——そして懸念を示すようになる。この活動が彼らの心を動かしたのは間違いない。



まず、彼らはなぜプロジェクトに参加したのかを話す。赤いシャツを着た比較的年配のクリストバルはこう言った。「わたしが参加したのは、父親として、父と子の関係に関心があったからです」

この他の大きな動機としては2つある。コミュニティ内で増加する暴力と虐待、そして十代の妊娠だ。暴力について、パトリシオが言った。「毎日、女性が暴力にどれだけ苦しめられているのかを見えています。多くは物理的ではなく言葉の暴力ですが、暴力にはたくさんの形があります。わたしのコミュニティでは、家にいる女の子が兄や父親、義理の父親に性的虐待を受けて妊娠するケースも見られます」

男性たちはみな、女性に対する暴力が増えていると感じている。その感覚はおそらく正しいだろう。サンタ・ドミンゴでは最も通報の多い暴力事件が家庭内暴力で、過去2年間で15,000件にもものぼる（注29）。

そして参加者は全員、通報が増えている理由として、これまではずっとドミニカ共和国の文化の一端とされてきた「マチスモ（男性優位主義）」という概念の一部に、女性たちが疑問を投げかけるようになってきたからだと言う。「今、女性が自分の権利を行使しようとしても、男性はそうした権利についての知識がありません。だから女性が自分の権利を主張すると、男性は怒るのです。男性も、考え方を変える方法を学ばなければ」

部屋に集まった男性たちは平等を信じると言うが、それを実践するのは必ずしも簡単なことではない。男性が動かなければ何も変わらないことを彼らは理解している。なぜなら、力を持っているのは男性で、たいていの場合、暴力を振るうのは男性なのだから。

マヌエルは、男性が集まってこうしたことについて話し合い、女性も同じようにするのが重要だと指摘した。しかしフレディも言ったように、「こうしたことには男性と女性が一緒に取り組むのが重要です」

「そうです」とルディオも言った。「そうすれば、家族はチームになれるのです」

## 結論と提言——「平等は幸せをもたらす」

*「より平等になることで、わたしは幸せになれます。男の子とも女の子とも親密な友情を築けて、良い対話ができる良い友になれます」*

ルイス、21歳、エルサルバドル（注30）

ジェンダー平等のために立ち上がるすべての男性が、社会に浸透していて日々固定化されていく規範に立ち向かうという困難に直面しなければならない。ジェンダー平等のために活動する男性たちには、女性たちと違って、この問題に関する長年の活動歴がないからだ。そして彼らは他の男性たちからだけでなく、女性たちからも冷笑や愚弄を受けるかもしれないのだ。

以前にも増して、凝り固まったジェンダーによる役割分担によって自分たちもまた貧困に

陥っているのだと男性たち自身が気づくようになってきている。力の共有は、実は全員にとってエンパワーメントとなるのかもしれない。男らしさを損なうのではなく、増幅させるものなのだ。世界各地の多くの社会で、女性に権利を与える法律に男性が賛成票を投じている。1902年にはオーストラリアの女性たちが、そのすぐ後にはフィンランドとノルウェーの女性たちが、その票を獲得した。これは、権力を持つ男性政治家の協力がなければ実現できなかった変化だ。最近ではルワンダで、議会における議員の男女比を同率にする法律を男性政治家たちが制定している。

しかし、変化をもたらすのは難しいことだ。それは単に法律の問題だけではない。法律が既に存在する社会でも、考えを変えさせるのはやはり難しい。行動の変化は個人、家庭、コミュニティ、国のレベルでジェンダー平等を実現する上で中核に位置するものだが、それが難しいのだ。今年の白書では、この変化を起こさなければ男の子と女の子が支払い続けることになる代償について説明している。また、行動の変化を強く促す上で役割を果たしたいくつかの主要な戦略を特定し、主要な取り組み（プログラム、キャンペーン、法律）をまとめ、我々が力を合わせて今のこの世界をもっと、より速く変えていくにはどうすればいいかを示している。

### 「'Real Choices, Real Lives' ～本当の選択、本当の人生～」 一 家族の問題

「'Real Choices, Real Lives' ～本当の選択、本当の人生～」の調査は、長期的な多国的調査で、女の子が生まれてからの9年間で影響を受けるさまざまな問題についてプランの研究者が詳細に調査しているものである。この調査では9カ国の貧しいコミュニティに暮らす142人の無作為に選ばれた女の子たちから成るグループを追跡し、詳細な聞き取り、グループによる話し合い、年次調査などで彼女たちの暮らしの現実を明らかにしている。今年も、調査に参加している家族のうち115家族に聞き取りを実施した。その他の家族は移住してしまったか、仕事のために参加することができなかった。残念ながら、調査開始時に対象となっていた女の子のうち6人が既に亡くなっている。ベナンのエミリエヌ、トーゴのフリドス・イド、フィリピンのメアリー・ジョイ・Tはみな、事故で亡くなった。ウガンダのレスティはマラリアで、ベナンのシメヌは未診断の病気で亡くなった。事故死を考慮した上でも、質の悪い家屋や衛生設備の欠如が、彼女たちの死因の根源にあると言えることができる。

調査対象グループの女の子たちは全員、2006年に生まれた。今年、彼女たちは5歳の誕生日を迎える。彼女たちが人生で今経験していること、特に正規の教育を受け始めるこの年の経験が、彼女たちの人生全体に影響を与えていくのだ。

女の子たちの大半が、現在、就学前教育施設に通っているか、既に小学校一年生になっている。女の子の親たちは、幼稚園での娘の成長を大変誇らしく思っており、一部の親は幼稚園から小学校へという過程の重要性と、就学前教育で学習能力と社会能力の基礎的要素

を積み上げることの重要性をはっきり理解している。ベナンでは、ユゲットの母親が、娘は「以前は恥ずかしがり屋でした。でも学校に通い始めてからはそんなことはありません。歌も歌えるし、詩も暗唱できるし、踊れるし、遊べるし、読み方も覚えています」と言う。フィリピンのアイレーシュの母親も、娘が「今では字の書き方を覚えて、色の名前も言い分けることができます。家に帰ってくると、学校で何をしたかを報告してくれます。とてもおしゃべりになりました。学校で何があったかを身振り手振りつきで教えてくれるので、パパとわたしはとても楽しんでます」と語る。

しかし、女の子うち数名は、健康状態の悪化が教育への希望に影を落としている。トーゴでは、フリドス・イスが毎日学校へ行くことができずにいる。カンボジアのリアクサも病気で入学式に行けず、そのために学年が1年遅れてしまった。

親の多くが、子どもの受けている教育の質についても懸念を示している。彼らは、子どもが何度も落第すること、教師の不足、1クラスあたりの生徒の数を心配している。彼らはもし経済的に余裕があれば、あるいはもし娘が一人でも今より遠くへ（男の子と同様に）通学できるなら、もっといい学校へ行かせてやりたいと思っていると話した。ウガンダでは、ジュリエットの兄弟姉妹たちは200人以上もの生徒がいるクラスで勉強している。彼女の両親は、ジュリエットをこの学校に行かせるべきかどうか悩んでいるが、無償で通える近くの学校はここしかないので、選択肢は限られている。

今年、プランは女の子の家族が家庭で起こることに関連してジェンダー平等をどのようにとらえているかに特に注目している。そのため、女の子の父親（場合によってはおじや祖父にも）詳細な聞き取り調査を数回にわたって実施した。

### 一家の長——保護者兼稼ぎ手

ほとんどの場合、女の子の父親たちは、自分の役割を一家の稼ぎ手、意思決定者、独裁者、そして保護者だと考えている。そして母親は家族の世話をする者とみなされている。聞き取り対象の父親たちは、自分の伴侶を決まって「礼儀正しい」「素朴」「行儀がいい」「ていねい」といった言葉で表し、家庭における女性の従属的な役割を示唆した。

ベナンでは、コンソラータの父親が彼の家庭における意思決定に社会的圧力がどれほど作用しているかを説明した。「アフリカでは、大きな意思決定をするのは父親です。しかし時には、母親が決断することもあります。わたしたちは夫婦ですから」。ブラジルのケヴィレンの父親は、夫婦として彼と妻は一緒に意思決定をするが、最終的な決定権は彼にあると言った。これは、聞き取りを行った父親の多くが持つ考えだ。

### 「父は誰よりも厳しかった」

調査対象の父親への聞き取りでは、彼ら自身の成長過程において不可欠だった暴力が、今の男らしさの概念を形作っていることもわかった。ほぼ全員が、子どもの頃にぶたれた経験を持っているのだ。女の子の父親たちとの話し合いでは、結婚した男は妻をコントロー

ルし、子どもに罰を与えることが期待されるという概念に男の子たちが慣らされていく様子が明らかになった。多くの父親が、暴力は両親の関係における日常の一部で、子ども時代の一番強い思い出が暴力だったと述べている。

ベナンに住むユゲットの父親は、「誰よりも厳しかったのが、父でした。子どもたちを一番よくぶっていたのも父でした」と話す。多くにとって、この日常的な男性による暴力は納得のいくものではなく、中には違う世界観を見せてくれる他の模範的人物を求めた者もいる。ベナンのエロワーズの父親は、生徒をぶたなかった教師を尊敬していた。「グノンハウ先生は、小学6年生のときの担任でした。忍耐強く、物事を説明するときに棒切れを使わない先生でした」

この調査及び今年の父親への詳細な聞き取り調査では、家庭内における男の子と女の子の役割がいまだに明確に区別されている世界が映しだされている。また、他の調査から導き出された、一家の意思決定者としての父親の役割が男の子と女の子の両方にとって重要であるという結論とも一致する。男性家長がジェンダー平等に尽力しない限り、男の子も女の子も、伝統的な男性と女性の型から逃れることは非常に難しいものとなる。

*「世界は変わってきていて、じきに誰もが女の子を男の子と違うように扱うべきではないと理解する日が来るでしょう」*

シャルネルの父親、シュルジェンス、ベナン

しかし、シュルジェンスが言うように、変化は起こりつつある。もちろん、この問題については多少のためらいがあるし、世代間やジェンダー間での意見の不一致もある。だが、多くの家庭で、女の子の教育を重要視するようになってきているのも事実だ。女の子と男の子を区別して扱うことに、疑問が投げかけられるようになってきている。差別が女の子だけではなく男の子の人生にもそして家庭やコミュニティの広範な成功にも悪影響を与えているという認識が広まっている。多くの人々が、ジェンダー平等が伴侶や友人、子どもたちとの関係にもたらすことのできる豊かさに気づき始めている。たとえば、フィリピンに住むドリーンの父親は、自分が家庭生活と娘の子ども時代の多くを見逃してしまったことに気づいている。「子どもたちには、私がどんないいことをしてやったかを一番覚えていてもらいたいと思っています。パパは、家族のために働いていたから毎晩遅く帰って来ていたのだと」

## 8つの行動計画——教育、キャンペーン、法律の制定

- 1 幼いうちに始める——就学前教育によって女の子と男の子の間の平等を推進し、親を取り組ませることができる
- 2 学校のカリキュラムを変革し、固定観念に疑問を投げかけて違いを認め合うようにす

る

- 3 性教育を改善するための政策作りに、女の子と男の子の参加を促す
- 4 女の子にとっても男の子にとっても学校を安全な場所にする
- 5 差別に取り組み、男性と男の子を参加させるキャンペーンを立ち上げる
- 6 子育てに父親と母親の両方が積極的に関わられるようにする法律を通過させる
- 7 女性と女の子に対する暴力を終結させる法律を施行する
- 8 機会の平等を保障する法律を制定する

#### 成功事例——プログラムH

「……ガールフレンドともっとよく話をすることを学びました。今では彼女のことをもっと気にかけています。(中略) 相手が何を求めているかを知り、相手の声に耳を傾けるのは大事なことです。(ワークショップの) 前は、ただ自分のことばかり気にかけていました」  
ブラジル、リオデジャネイロの若い男性 (注 31)

プログラムHは、15歳から24歳の若い男性が「男らしさ」の伝統的規範について安全な場でじっくり考えられるように支援するプログラムである。幅広いメディア、キャンペーン、若者向け教材を活用した、革新的な評価モデルを確立している。プログラムHは、ジェンダー平等を信じ、実践する若者を「かっこいい」と思わせる内容になっている。プログラムHの活動に参加した後、若い男性のコンドーム使用率が増加し、友人や恋人との関係が改善し、男性の責任として家事を引き受ける割合が増加し、セクシャルハラスメントや女性への暴力が減少するなど、数々の良い変化が報告されている。プログラムHに参加した若い男性たちのガールフレンドらも、二人の関係が以前よりも良くなったと感じている、と答えている (注 32)。インドで伴侶に対する暴力を正当化する人の割合は25%から18%に減少し、ブラジルのマレーでは女性の伴侶を自分と同等だと考える若い男性の割合が48%から68%に増加している (注 33)。

「女性と女の子が虐待され、彼女たちの願いが無視されると、私たち全員が苦しみます。彼女たちから安全と機会を奪うことで、私たちは社会に不公平を植え付け、人口の半数の能力を活用し損ねるのです。民主主義について語りながらも、女性と女の子の権利を否定する国はあまりに多いのです……私は平等を目指すキャンペーンに身を投じるよう、すべての男性と男の子に呼びかけたいと思います」

カルドーズ大統領

元ブラジル大統領、エルダーズの一員

(脚注)

- 1 マニーサは、2011年「Because I am a Girl」報告の諮問機関の若者代表。
- 2 ダニエル、15歳、カナダ出身。2011年「Because I am a Girl 世界ガールズ白書」の諮問機関の若者代表であるマニーサに同意しての発言。
- 3 Kimmel, Michael, 「Boys and School: A Background Paper on the “Boy Crisis” (男の子と学校——『男の子の危機』に関する背景報告書)」、スウェーデン政府調査、2010年。
- 4 Barker, Gary, 「Dying to be men: Youth masculinities and social exclusion (男らしさのために死ぬ——若者の男らしさと社会的疎外)」、ラウトレッジ出版、ロンドン、2005年。
- 5 Barker, Gary, 「Dying to be men: Youth masculinities and social exclusion (男らしさのために死ぬ——若者の男らしさと社会的疎外)」、ラウトレッジ出版、ロンドン、2005年。
- 6 Barker, Gary, 「Dying to be men: Youth masculinities and social exclusion (男らしさのために死ぬ——若者の男らしさと社会的疎外)」、ラウトレッジ出版、ロンドン、2005年。
- 7 ブラジル国家統計局(IBGE 2004)からの引用。引用先は Barker, Gary, 「Dying to be men: Youth masculinities and social exclusion (男らしさのために死ぬ——若者の男らしさと社会的疎外)」、ラウトレッジ出版、ロンドン、2005年。
- 8 Courtenay, Will H., 「Better to die than cry? A longitudinal and constructionist study of masculinity and the health risk behavior of young American men (泣くよりは死んだほうがましなのか? アメリカの若い男性における男らしさと健康リスク行動の長期的かつ構築的研究)」(博士論文)、カリフォルニア大学バークレー校、『Dissertation Abstracts International (学位論文抄録誌)』、1998年。
- 9 UNAIDS(2008年)、「世界のエイズ流行 2008年版報告書」、ジュネーブ、UNAIDS、33ページ。
- 10 プラン・インターナショナル、2011年「Because I am a Girl 世界ガールズ白書」向けに実施された調査による。
- 11 プラン・インターナショナル、2011年「Because I am a Girl 世界ガールズ白書」向けに実施された調査による。
- 12 Morrell, Robert, Dorrit Posel, Richard Devey, 「Counting Fathers in South Africa: Issues of Definition, Methodology and Policy (南アフリカの父親を数える——定義、手法、方針の課題)」、『Social Dynamics: A Journal of African Studies (社会動学——アフリカ研究)』29巻2号、2003年。
- 13 Coley, R L, E Votruba-Drzal, H S Schindler, 「Fathers' and mothers' parenting predicting and responding to adolescent sexual risk behaviors (父親と母親の子育ての中で思春期の危険な性行為を予測し対応する)」、『Child Dev (子どもの成長)』80巻3号、2009年。
- 14 Ream, Geoffrey L, Ritch C Savin-Williams, 「Reciprocal associations between adolescent sexual activity and quality of youth-parent interactions (思春期の性行動及び若者と親の交流の質に見る相互関係)」、『Journal of Family Psychology (家庭の心理学)』19巻2号、2005年。
- 15 UNFPA, 「State of the World's Population – The Promise of Equality: Gender Equity, Reproductive Health, and the Millennium Development Goals 2005(世界人口の現状——平等の約束——ジェンダー公正、性と生殖の健康、ミレニアム開発目標 2005年)」、ニューヨーク、UNFPA、2005年。

- 16 Barber, Brian K., 「Adolescents and War: How Youth Deal with Political Violence (思春期の若者と戦争——若者が政治的暴力にどう対処するか)」、アメリカ、オックスフォード大学出版局、2009年。
- 17 Ellis, Bruce J, John E Bates, Kenneth A Dodge, David M Fergusson, L John Horwood, Gregory S Pettit, Lianne Woodward, 「Does father absence place daughters at special risk for early sexual activity and teenage pregnancy? (父親の不在によって娘の早熟な性行為と十代での妊娠というリスクが高まるか?)」、『Child Development (子どもの成長)』74巻3号(2003年5-6月)。
- 18 Wenk, Dee Ann, Constance, L Hardesty, Carolyn S Morgan, Sampson Lee Blair, 「The influence of parental involvement on the well-being of sons and daughters (息子と娘の幸福に親の干渉が与える影響)」、『Journal of Marriage and Family (結婚と家庭)』56巻1号(1994年2月)。
- 19 McLanahan, S, L Bumpass, 「Intergenerational consequences of family disruption (家庭分裂の世代を越えた結果)」、『The American Journal of Sociology (米国社会学)』94巻1号(1988年7月)。
- 20 Stern, Orly, Dean Peacock, Helen Alexander (編), 「Working with Men and Boys: Emerging strategies from across Africa to address Gender-based Violence and HIV/AIDS (男性と男の子との取り組み——アフリカ全土でジェンダーに基づく暴力と HIV 及びエイズに取り組む新たな戦略)」、ソクケ・ジェンダー・ジャスティス・ネットワーク及びメン・エンゲージ・ネットワーク、2009年。
- 21 インスティテュート・プロムンド、「父性と家族介護」、プログラム H、インスティテュート・プロムンド、ブラジル、1999年。
- 22 プラン・フィリピン 2008年「国別プログラム進捗報告」より引用、プラン・東サマール地域事務所により更新、2008年。
- 23 UNICEF, 「Gender Achievements and Prospects in Education, Gap report Part One (教育におけるジェンダー別成績と見通し、格差報告第1部)」、ニューヨーク、UNICEF、2005年。
- 24 Nikki van der Gaag, 「女の子に関する報告書」2011年著者。
- 25 教育省, 「National Policy on Integrated Growth and Development for Early Childhood (幼児期の総合的成長と発展における国策)」24ページ1a版、プラン・エルサルバドルの国別戦略計画 2012年—2016年
- 26 Barker, Gary, Manuel Contreras, Brian Heilman, Ajay Singh, Ravi Verma, Marcos Nascimento, 「Evolving men: Initial results from the International men and gender equality survey (進化する男性——男性とジェンダー平等に関する国際調査の初期結果)」、女性研究国際センターとインスティテュート・プロムンド、2011年。
- 27 UNICEF, 「Gender Achievements and Prospects in Education, Gap report Part One (教育におけるジェンダー別成績と見通し、格差報告第1部)」、ニューヨーク、UNICEF、2005年。
- 28 Nikki van der Gaag, 「女の子に関する報告書」2011年著者。
- 29 Jackman, Daniel, 「Dominican Republic: Shocking Level of Domestic Violence (ドミニカ共和国——衝撃的な数の家庭内暴力)」、ラテンアメリカンビューロー、2010年11月24日。
- 30 著者へのインタビュー、2011年。
- 31 Ricardo, Christine, Nascimento, Marcos, Fonseca, Vanessa, Segundo, Marcio, 「Program H and

Program M: Engaging Young Men and Empowering Young Women to Promote Gender Equality and Health (プログラム H 及びプログラム M——ジェンダー平等と健康を推進するために若い男性を取り組ませ、若い女性のエンパワーメント)」、ワシントン D.C.、汎米保健機構、インスティテュート・プロムンド、2010 年。

32 Barker, Gary, Nascimento, Marcos, Ricardo, Christine, Segundo, Marcio、「The individual and the political: Promundo’ s evolving approaches in engaging young men in transforming masculinities (個人的と政治的——男らしさを変革するべく若い男性を取り組ませるプロムンドの発展的取り組み)」、HIV 及び性と生殖の健康から学んだことをその他の分野と併せてエイズ、ジェンダー、発展の再考に役立てる国際シンポジウム「男らしさを政治化する——個人を超えて」、セネガル、ダカール、2007 年 10 月 15 日—18 日で発表された論文。

33 Ricardo, Christine, Nascimento, Marcos, Fonseca, Vanessa, Segundo, Marcio、「Program H and Program M: Engaging Young Men and Empowering Young Women to Promote Gender Equality and Health (プログラム H 及びプログラム M——ジェンダー平等と健康を推進するために若い男性を取り組ませ、若い女性をエンパワーメントを進める)」、ワシントン D.C.、汎米保健機構、インスティテュート・プロムンド、2010 年。

世界の女の子に、生きていく力を。

